

事業評価の方法と実際

(1) 事業評価の方法

ア 事業評価の考え方

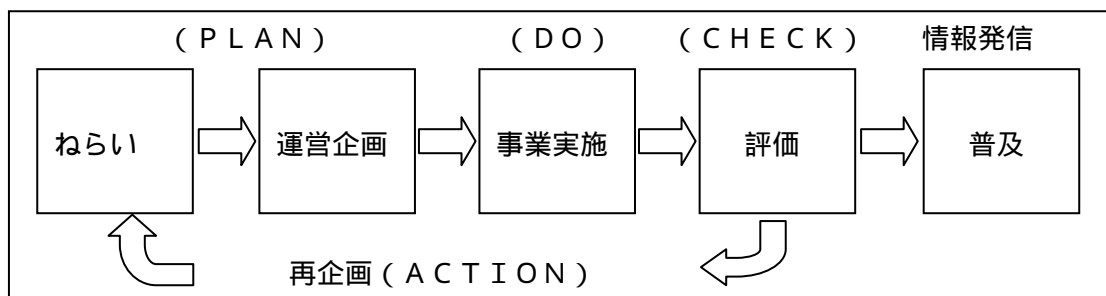
事業評価の定義

事業評価とは「事業活動の実態や成果を分析・測定し、実施期間・施設・団体等の目標や当該事業目標に照らして解釈・価値判断を加えること」といわれている。事業評価には行政機関やNPO 団体などが行う個々の事業についての評価（学習プログラム評価等）と個々の事業の総体としての全体評価があり、これには単年度、中長期の事業評価がある。

事業評価の目的と意義

第 章の企画の方法で記述されたとおり事業、ねらいと運営計画(Plan)を立て、実施(Do)し、評価(Check)して完結するものではない。下図のように、事業の改善点を明らかにし、より効果的で質の高い事業を再企画 (Action) することが評価の目的である。

図 11 事業企画のサイクル



このような目的で行う事業評価の意義には、まず、当該事業、単年度計画、中・長期計画の改善を図ることができるということである。次に、事業実施にかかる無駄を省き効率化を図ることができる。その他、事業の結果や成果を示すことで、説明責任を果たすことができるとともに、当該事業の意義や実施機関や団体などの意義を明確にすることができる。さらには、事業の意義を明確にすることにより、財源確保の根拠資料にもなる。

評価の種類

事業評価は、「だれが」「何を」「いつ」「どのような方法で」「何を基準に」評価するかというような観点から分類できる。

だれが評価するのか？

大きく分けると事業を行った機関や施設、団体もしくは事業担当者やスタッフが評価する自己評価と事業に参加した当事者やその保護者、専門家や評価機関が評価する他者(第三者)評価がある。言うまでもないが、サービスを受けた参加者の評価を大切する。ただ大人は肯定的な評価をする場合が多いので事業改善の資料となりにくいケースがある。

何を評価するのか？

事業実施前に、事業を実施した場合に予想される影響を評価するアセスメント、事業を実

施した過程を評価するプロセス評価、事業への参加者数や利用者数など、事業の直接的な結果について評価するアウトプット評価、事業の結果生じた成果や効果の評価するアウトカム評価がある。例えば、不登校対応事業を行った結果、後日参加者が学校に行けるようになれば、アウトカムである。ただ、アウトカムには、事業終了後、すぐに成果が得られるものと、成果が得られるまでに、長時間かかるものがある。不登校対応のような事業は、後者といっただろう。

いつ評価するのか？

事業実施前に行う事前評価（診断的評価）、実施の途中に実施状況や計画修正のために行う中間評価、事業実施後に行う事後評価がある。後述する知立市の「チャレンジキャンプ」は評価を3回行っている。

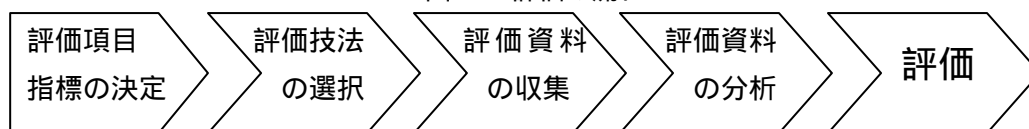
評価の視点

事業評価では、どのような視点に立つかによって、設定する指標や観点が異なるため、評価結果も変わってくる。どのような視点に立って、評価をするかを明確にして評価するかが大切である。評価の視点として、行政評価等でよく使われるのが、政策評価ガイドライン及び文部科学省の政策評価であり、事業の「必要性」、「効率性（費用対効果）」、「有効性」、「公平性」、「優先性」等がある。

イ 評価の手順

事業評価は次のような手順で行う。

図12 評価の流れ



まず、評価する項目と評価をする目印となる指標を決める。評価項目と指標を決めるのは、事業の目標（ねらい）・企画立案の段階で決めておかなければならない。なぜならば、事業はねらいがあって実施するものであり、そのねらいが達成できたかどうかを評価することになるからである。

次に、評価技法を決める。評価技法にはさまざまなものがある。評価には、量的な資料から分析評価する定量的評価と、質的な資料から分析する定性的評価がある。定量的評価ができるものに、予め目標値を決めて、その達成値を測る達成（充足）率の利用がある。例えば、参加者の目標値を100名（募集人数）としたところ、50名であれば達成率は、50%ということになる。定性的評価には、参加者や事業者の反応、意見等の記録によって達成度を測る記述式の利用がある。

事業の効果を参加者やスタッフから定質・定量的に測ることができるものとして、質問紙調査、いわゆるアンケートがある。ここでは、ほとんどの事業で利用されているアンケートの作り方について説明する。

アンケートは回答方法から大きく分けると、二つあり、「とてもそう思う」「まあまあそ

う思う」「あまりそう思わない」「思わない」といった選択肢から選ぶ「尺度」と、ある項目について文章で回答する「自由記述」がある。尺度は、記入者が簡単に回答でき、事業の効果を定量的評価できるということで、分析、評価が容易にできる。また、記入者が簡単に回答できる。しかし、質問項目しか聞け

図 13 参加者アンケートの実際

ないことから、深いところまで知ることができない。そのため、質問項目を精選して選択しなければならない。一方、自由記述は、アンケートの作成が簡単で、深いところまで知ることができる。しかし、回答に時間がかかるうえ、集計にも時間がかかる。また、分析・評価が主観的になりやすい。このように、どちらにも一長一短があることを理解し、効果的なアンケートを作成したい。

右のアンケートは、独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下「機構」という）が、実際に使用している企画事業のアンケートである。これは事業自体の評価と機構の評価として中期目標に示される「参加者の満足度」を測定するもので、問2（1）の設問から「4満足」「3やや満足」を合算した数値が全体の80%以上でABC評価のAとしている。

なお、アンケート（調査用紙）については、自然体験活動が子どもの「生きる力」に及ぼす影響を測定する「IKR 評定用紙」やキャンプにより小学生の社会性や人間関係に及ぼす影響を測定する「小学生用社会的スキル尺度」など、研究実践されている優れたものがある。詳細については、機構ホームページの『事業報告書検索』で調査研究や事業の報告書を検索できる。

平成 年度 (企画事業名) に関するアンケート例(参考) (対象:子ども)

(施設名:)

(施設名)の企画事業「 」に参加いただき、ありがとうございました。
企画事業をより良いものにするため、あなたが参加して思ったことを教えてください。

問1.性別に 性、年齢は()に書いてください。
性別:(男 ・ 女) 年齢:() 歳

問2.事業に参加してあなたが感じたことを教えてください。
答は、下の4-0の分け方の中から1つをえらんで をつけてください。
〔 4 満足 3 やや満足 2 やや不満 1 不満足 〕・()は自由に書いてください。

(1)事業について教えてください。

事業全体をとおしてはどうでしたか。	(4 3 2 1)
()	()
この事業の活動はどうでしたか。	(4 3 2 1)
()	()
この事業の進め方はどうでしたか。	(4 3 2 1)
()	()
(施設名)の職員はどうでしたか。	(4 3 2 1)
()	()
(施設名)のボランティアはどうでしたか。	(4 3 2 1)
(ボランティアがいた場合)	()
()	()

問3.この事業に参加する前のご様子について教えてください。
それぞれの質問文ではまる番号に をつけてください。

(1)これまで(満足施設)の事業に参加したことはありますか。
2をえらんだ人は、回数を書いてください。
1 今回、初めて参加した 2 これまで(回)ある

(2)この事業をどのようにして知りましたか。(いくつえらんでもかまいません)
1 チラシを見て 2 人から教えられて 3 雑誌・新聞・テレビ・ラジオなどで
4 ダイレクトメールで 5 インターネットで 6 その他()

(3)どうしてこの事業に参加しようと思いましたか。(いくつえらんでもかまいません)
1 内容がおもしろいから 2 友だちにさそわれて 3 親や先生にすすめられて
4 先生がよいので 5 友だちを広げるため 6 自分のため
7 その他()

問4.この事業に参加して、気づいたこと、思ったことがあったら書いてください。

引用・参考文献

- ・井内慶次郎監修、山本恒夫、浅井経子、椎廣行編 「生涯学習[自己点検・評価]ハンドブック[行政機関・施設における評価技法の開発と展開]」、文憲堂、2004
- ・社団法人日本キャンプ協会、「キャンプのものさし 野外教育活動を評価するための尺度集」、2006
- ・独立行政法人国立青少年教育振興機構編、「事業プログラムの効果測定方法の開発研究」、独立行政法人国立青少年教育振興機構編、2008
- ・原義彦、日本生涯教育学「生涯学習研究e事典」「事業評価の技法」(<http://ejiten.javea.or.jp/>)

(2) 事業評価の実際

「平成 20 年度子ども交流・体験活動推進事業」で、知立市教育委員会が実施した「知立チャレンジキャンプ」を例に、事業評価の実際について紹介する。

ア 事業の概要

事業名：「知立チャレンジキャンプ」

事業の主旨

不登校や不登校傾向にある児童生徒が、親から離れて、自然の中で、寝食をともにしながら一緒に体験活動等を通し人間関係を築く力を育成するとともに自己チャレンジ的な活動に取り組むことで、我慢すること、そのあとにある達成感を味わわせることにより、自立心を身につけさせることをねらいとする。

期日と場所：平成 20 年 7 月 22 日（火）出会いミーティング 指導者の研修会（市役所）

8 月 4 日（月）チャレンジキャンプ

～ 6 日（水） 知立市野外教育センター（長野県伊那市）

9 月 27 日（土）再会ミーティング（市役所）

参加対象：市内の不登校及び不登校傾向にある児童生徒とその友人、昨年度参加者

募集人員：20 名

実行委員会（引率者、指導者）

参加者の担任等、知立市教育委員会、あいフレンド（大学生サポーター）、西三河ホームフレンド、発達障害児等支援補助員、むすびあい教室（市適応指導教室）指導員 他
内容

	午前	午後	夜
8/4（月）	集合 かんてん工場見学	夕食作りにチャレンジ	ふれあいタイム
8/5（火）	登山・散策にチャレンジ	川遊び体験	お楽しみタイム
8/6（水）	振り返りタイム	ゴルフにチャレンジ	解散

イ 事業評価と評価指標

評価指標は、参加者が体験活動を通して「自立心」「人間力」の育成、「体験活動への関心」に関してどのような成果が見られるか評価していくために以下のように設定した。

評価指標

参加者の満足度	事業全体に対する満足度をつかむ。
自立心	自分が決めた目標に向かって我慢して遂げることができる。
人間力 （人間関係を築く力）	参加者同士や担任、指導者と円滑にコミュニケーションすることができる。
体験活動への関心	自然体験活動をする中で、規則正しい生活をし、体験活動を見つめ直すことができる。

ウ 評価の方法

上記の点について、次の方法で参加児童生徒の変容をとらえ、事業評価をした。

児童生徒へのアンケート調査

出会いミーティング、チャレンジキャンプ、再会ミーティングで、同じ質問項目による質問紙のアンケートを行い分析した。

保護者・スタッフの感想文

キャンプの終了後、自由記述で感想を書いていただき、評価指標に照らし合わせて、感想文（資料）を分析した。

指導者による観察

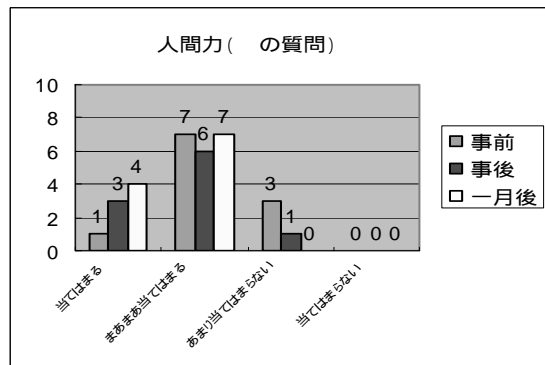
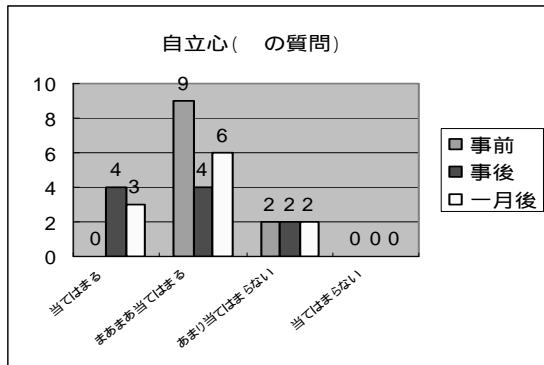
参加者の活動の様子や、ふりかえりの記録内容から分析した。

エ 評価資料から見る成果と課題

定員充足率 : 参加者数 / 募集人数 = 11名 / 20名 = 55%

児童生徒のアンケート結果 : 満足度 100% (満足 8名 やや満足 2名 無回答 1名)

評価指標	質問項目	時期	回答				無回答
			当てはまる	まあまあ当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	
自立心	自分の決めた目標に向かってくじけず努力する。	事前	0	9	2	0	0
		事後	4	4	2	0	1
		一月後	3	6	2	0	0
	我慢強く取り組むことができる。	事前	2	2	6	1	0
		事後	4	4	2	0	1
		一月後	2	6	2	1	0
人間力 (人間関係を築く力)	みんなと気軽に話すことができる。	事前	1	7	3	0	0
		事後	3	6	1	0	1
		一月後	4	7	0	0	0
	だれに対しても思いやりをもって接することができる。	事前	2	6	3	0	0
		事後	2	8	0	0	1
		一月後	2	7	2	0	0
	担任の先生は話しやすい。	事前	3	5	2	0	0
		事後	6	3	1	0	1
		一月後	4	6	1	0	0
体験活動を見つめ直すきっかけ	早寝早起きなど、規則正しい生活ができる。	事前	1	3	6	1	0
		事後	4	4	2	0	1
		一月後	1	5	4	1	0
	自然の中で楽しく活動できる。	事前	4	5	2	0	0
		事後	6	2	2	0	1
		一月後	5	5	1	0	0



保護者の感想

- ・登山で、頂上まで登れたことがいちばんうれしかったようで、帰って第一声が「登山で頂上まで登ったよ」でした。苦しくても自分次第ということがわかればよいと思います。これをきっかけに、何にでもチャレンジできるようになってほしいです。
- ・学校も学年も違う参加者と過ごすことに不安もあったようですが、勇気と自信を保って臨めたという話を聞きました。充実感や達成感といういちばん実感してほしいと思っていた気持ちを持ち帰ってきてくれたことをとてもうれしく思います。
- ・登山には本人も少し不安ながらもご指導のもと到達できた思いは、格別だったみたいで「達成感」が大きく、新たな「自信」に繋がっていたようです。この「自信」の積み重ねが自立のとても重要な足がかりになると思います。

指導者、引率者の感想

- ・参加者同士だけでなく、担任やあいフレンド、ホームフレンドとの関わりが児童生徒には人間関係を築く力のきっかけになったと思う。
- ・日がたつにつれ、うち解けていき、2日目の川遊びでは、気を許して担任とふれあっている姿が見られた。
- ・登山は参加者にとってたいへんだったが、頂上について、「みんなと一緒にだから登ることができた」と話していたので、達成感と協調性を実感してくれたと思った。

オ 成果と課題

アンケートの結果から、「自立心」「人間力」に対する質問について、事前よりも事後のほうが「当てはまる」との回答が増えていることがわかる。特に、「自立心」に関する質問について、事前は1人も「当てはまる」と回答した参加者がいなかったのに対して、事後及び1月後の結果では、「当てはまる」の回答が3～4名いる。また、「人間力」に関する質問に対して、1月後の調査では「あまり当てはまらない」の回答は1件もなかった。「体験活動を見直すきっかけ」については、事後の結果からは効果がみられるが、1月後は大きな変化は見られなかった。

しかし、保護者や指導者の感想から、寝食をともにして共同生活をしたり、登山などのチャレンジ的な体験活動をしたりすることを通して、自立心や人間力を育成することができたものと感じている。

不登校生徒を対象とした事業で多い課題に定員の確保がある。本事業は20名の募集に対し11名の参加者だった。広報の方法について、不登校児童生徒に対応している教室や団体、児童相談員やスクールカウンセラーと連携し、不登校児童生徒や家庭に参加を呼びかける必要がある。

本事業には、参加者11人に対し30人近いスタッフが関わっており、安全について十分配慮されていた。しかし、「子どもたちが担任等とつながりを深める場とする」という目的については、出張や研修と重なり3日間とも参加できない教師がほとんどだった。教師の参加しやすい環境を整えていくことが課題である。